

授業中の私語

——「心理学01」受講生による自己分析結果——

冷水 啓 子

I はじめに

近年、小・中・高校のみならず大学においても授業中の私語が問題視されるようになった。教員間の雑談のなかでも、授業中に学生たちが私語して困る、どうすれば私語をやめさせることができるか、という「悩み」とも「愚痴」ともつかない話をよく聞く。筆者も、授業中の私語に手を焼いているという一人である。

今年度筆者が担当している講義科目は、教職課程関連科目の「教育心理学」、
「教育方法学」、
「視聴覚教育」、および、社会福祉士養成課程関連科目の「心理学01」である。問題の私語はこの「心理学01」の前期に集中して生じていた。

1. 私語とは何か

ところで、一般に「私語」はどのようにとらえられているであろうか。広辞苑第5版では、私語とは「ささやき」「ひそひそ話」のことだとされている。しかし、最近の大学生による私語を研究した新堀通也¹⁾は、「かつてはこうした私語も、ひそひそ、こっそりで行われ、話し手にも聴衆にもさしたる迷惑をかけなかった。それだけ私語する者には一種の罪障感²⁾ないし公德

心が働いており、私語は私的に行われたともいえる。ところが今や私語が公的な場で公然と行われるようになったところに、大きな特徴がある」という。さらに、教員に私語とは何か定義づけてもらったある調査結果によると、「授業中に生じるすべてのおしゃべり」とするが28%、「授業を妨げるおしゃべり」とするが35%、「授業に関連ないおしゃべり」とするが34%というように、教員によって見解が分かれている。私語に対する許容範囲が個人によって異なるものの、大部分の教員（85%）はあらゆる私語に対して不快感を抱き、「私語は慎むべきだ」と考えているようである³⁾。

筆者は「授業を妨げるおしゃべり」を私語と考えている。「授業に関連あるおしゃべり」も度が過ぎれば授業の妨げになる。かといって、「授業中に生じるすべてのおしゃべり」を禁止するとなると、厳しい管理体制をしく必要が生じる。その場合、授業にゆとりや幅がなくなり、かえって授業の活性化を妨げることになるかもしれない。常々学生には、授業に関係あることは私語ですませるのでなく、手を挙げて教員へ質問するよう促してはいるが、日本の学生にとってこれはとても難しいことのようにである。授業を中断させても授業内容に関連した疑問点や確認事項を直接教授に質す、授業中に人前で堂々と自分の意見を言ったり教授や他の学生と議論する、といった経験や訓練を積んできていない彼らには、このような要求は酷であるかもしれない。こういう理由もあって、筆者は、あまり気にならない程度の私語には目をつむるようになってきた。

2. 「心理学01」の場合

では、なぜ「心理学01」の前期クラスで私語が多く発生したのであろうか。考えられる原因を次に述べてみよう。

「心理学01」は、本学では最も大きな516席を有する2-202教室で行っている。例年受講生の多い「心理学」（共通自由科目）では毎年4～5クラスほど開講して対応しているが、今年度は予想に反し「心理学01」に受講生が集中してしまった。教室の収容能力を超えた学生が登録した結果、開講当初の

4月段階では、全員が着席できず最後尾の窓際や通路にまで座り込む学生で教室は溢れ返っていた。この「心理学01」は社会福祉学科・社会福祉士養成課程関連のクラスであるが、他学部・他学科生にも開放されているため、皮肉なことに他の心理学クラス以上に受講生が多く集まってしまったようである。大教室に大人数の受講生がひしめき合うという、私語を誘発しやすい多くの条件を抱えこんだまま、前期の授業がスタートしたわけである。

ところが、授業開始後すぐに不手際が生じた。教室のマルチメディア環境上の制約により、教材の提示方法を急遽変更せざるをえなくなったことである。当初は学内LANに繋いだパソコンを利用して教材提示しようと考えていたが、パソコン画面を教卓前の大スクリーンに映すことはできても、教室の両横にあるモニター上には提示できないことがわかり、2回目の授業からパソコンを諦めてOHCを利用せざるをえなかった。テキストの活字の大きさも最初は20ポイント程度のものではあったが、それでは後ろの学生に見えにくいことがわかり、試行錯誤のうえ、最終的にはゴシック体の文字で28ポイントまで拡大したものを使うことにした。このように教材の提示方法が確定するまでに時間がかかり、教室の物理的条件が整わない間は、特に私語を誘発しやすい状況であったと考えられる。しかし、これらは特殊な条件下での私語の発生であるといえよう。もっと一般的な場合ではどうであろうか。

授業が本格的に始まってからは、マルチメディアの活用に力を注いだ。まず、ビデオ教材を積極的に導入し、学生の関心を高めるよう配慮した。その際、ただビデオを見せるだけでなく、視聴に際しその手引きとなるようなプリントを前もって与えた。これは、ビデオにでてくる重要項目やその内容の要約を時系列上に並べたもので、その空白部分には学生自身でもいろいろと書き込みができるようになっていた。また、項目や説明文のなかに部分的に空欄を設け、視聴中に適切な用語を記入させ、後で答え合わせをしたり、重要事項の解説を行ったりした。これらのプリント教材や教授方法は、ビデオの内容理解を促進させたとして学生には評判がよかったようである。

また、教壇に立ったまま授業を続けていると学生も飽きてきておしゃべり

も増えてくるので、時々教壇を降りて机間巡視しながら授業を行った。テキストを開いていない学生にはテキストを出すよう注意をしたり、重要な概念についての理解度を確認するために目に留まった学生へ直接質問をしたりしながら教室を一巡し、教員の側でも適宜気分転換を図った。

しかし、それにもかかわらず私語が高じてきた場合には、授業を中断し、教壇から全体に対しておしゃべりをやめて静かにするよう口頭で促した。特に騒がしいグループを見つけると、その方を指さして「その赤いTシャツを着た人と隣の人、おしゃべりやめなさい」といった調子で対象を絞って直接注意を行った。数人で声高にしゃべりあう、声を立てて笑いさざめきあうといった目に余る私語が起きた場合は、わざわざそこまで出向いて行き厳しく叱責した。それでもおさまらないときには、最終措置として学生証を没収したり（学籍番号と氏名を記録してから授業終了後に返却）、退場を命じたりすることを試みた。

このように、教員個人の努力で可能な限りさまざまな工夫を凝らしたにもかかわらず、授業中の私語はなくならなかった。特定のグループを厳しく叱責した直後には静けさが戻るが、しばらくたつとまたざわついてくるのが常であった。

思うに筆者が学生の頃（1970年代～80年代の中頃にかけて）には授業中の私語はほとんどなかった。私語することには罪悪感を伴ったため、よほどのこと（教授の指示を聞き漏らし、どうしても隣の学生に確認する必要が生じたなど）がないかぎり私語したことはなかったように記憶している。というよりは、授業中は（その頃の授業はほとんど講義形式であったため）ただひたすら教授の話に耳を傾けノートを取ることに専念していたから、おしゃべりしている余裕などなかったというのが正直なところである。

時代は変わり、授業中の私語がめずらしくなくなった今、実際に学生たちは私語についてどのような認識を持つようになったのであろうか。学生たちがいとも無邪気に授業中の私語に興じていられるのはなぜなのか。「心理学01」の授業で毎回困惑させられている学生の「私語する心理」を明らかにし

授業中の私語

て、私語のない（私語に妨げられない）授業実践への基礎固めを行う必要性を強く感じた。

そこで、前期の最後に、レポート課題として「私語の心理学」を取り上げ、受講生各自に改めて授業中の私語について「心理学的に」分析させることにした。このレポート課題にはねらいが2つあった。第1は、学生の私語する率直な気持ちを知り、その心理的メカニズムを明らかにすることである。第2は、前期で学習した心理学理論に基づいて学生に私語する自己を客観的に分析させることにより、何気ない私語がもたらす弊害に気づかせ、授業態度の改善への内発的動機づけを行うということである。その背景には、今までのように私語を強制的に制止するだけではこれからも私語は減少しないであろう、自己分析過程を通じて私語に対する学生の認識そのものを変えさせなければ授業改善は望めないのではないか、という筆者の強い危機感があった。

7月末までに提出されたレポートは、夏休み中に3週間ほどかけて読み、内容の分析を行った。その結果をA4サイズの手紙4枚にまとめ、プリント教材を作成した。そして後期の最初の授業時にそのプリントを配布し、1時間半を使って結果の報告と問題提起を行った。

Ⅱ 「私語の心理学」に関するレポート課題

1. レポート課題の内容

「私語の心理学」についてのレポート課題の内容は次の通りである。

課題2 人はなぜ授業中に「私語」をするか？ どうすれば私語はなくなるか？

最近学校で困難な問題の一つになっている「授業中の私語」について、「学習」、「認知」、「動機づけ」、「情緒」などの観点から心理学的に分析し、あなたの見解を述べてください。

テキスト以外に、読んで参考にしたり内容の一部を引用した文献があれば、必ず最後にその文献リストを記載すること。

期限内に前期レポートを提出しなかった場合は、単位取得ができなくなるので注意してください。

期限までに提出されたレポートは626人分あった。そのなかには実にさまざまな学生たちの自己評価、見解、提言などが展開されていた。もちろん玉石混淆ではあるが、このレポート課題を思い立った当初の懸念——学生がはたして真摯にこの課題に取り組むであろうか、かえって反発するのではないか——は取り越し苦労だったようである。「心理学01」の前期の成績評価に関わるレポート課題でもあるため、たいていの学生は適宜参考文献にもあたりながら、まじめに取り組んだ様子がうかがえた。全レポートの内容分析を行った結果のまとめを次に掲げる。これは学生へ配布したプリントの内容に一部加筆・修正を加えたものである。

2. レポートの内容分析結果：

授業中の私語——「心理学01」受講生による自己分析結果——

1) 授業中の「私語」は迷惑である；2) 迷惑行為だと分かっているのに、なぜ、人（あるいは私）は授業中に私語するか？；3) では、どうすれば私語はなくなるか？；の順に学生たちの自己評価、見解、提言などの内容を整理し列挙していく。ただし、同じような内容のものが重複して出現することが多かったので、それらは一括して一項目としてまとめて記述したが、微妙にニュアンスが異なる場合は併記を行った。したがって、今回の報告ではそれぞれの項目の出現頻度については分析対象から除外した。なお、以下の＜＞内の記述は各項目内容に対して筆者が付加した注記および分類基準やその名称などである。

1) 授業中の「私語」は迷惑である。＜たとえば、次の3つの個人的見解は特筆すべきであろう。＞

授業中の私語

- ・私語を頻繁に注意されると、その都度授業が中断され、真剣に聞いている学生のやる気もなくなる。自分はしゃべっていないのに全体への注意・叱責を聞いている時間はとてもいやなものだ。
- ・授業中の携帯電話の使用も迷惑である。教室に「電波妨害器」を張り巡らして使用できないようにしてほしいくらいである。
- ・聴覚障害者に対する配慮をしてほしい。補聴器は雑音を拾うので、周囲がうるさいと教師の声が判別できない。

2) 迷惑行為だと分かっているのに、なぜ、人（あるいは私）は授業中に私語するか？

○私語を誘発する要因＜全体として次のような誘因が多く挙げられていた。＞

- ・「大学」と「小・中・高校（塾・予備校）」の時の授業、「私語の多い授業」と「少ない授業」を比較検討してみると、大教室で大勢の学生がいる、友達同士で座っている、授業への動機づけが低い、授業が面白くない、友達としゃべりたい、教師が恐くない——から私語をするのではないか。＜このような私語を誘発する要因をなくしていかない限り、私語もなくならないだろうという悲観論が少なくなかった。＞

○人が（あるいは私が）私語する理由

＜基本的欲求＞

- ・友達とのおしゃべりのほうが授業より楽しい。おしゃべりは我慢できないから。
- ・私語は人にとってなくてはならないもの。生きるための「生理的欲求」である。
- ・私語は授業中のフラストレーションを回避するための逃避行動。
- ・周りがシンと静まり返っていると急に何とも言えない不安が広がる瞬間がある。そんなときどうしても誰かと話したくなる。

<社会的動機，仲間関係の維持>

- ・他人と関わり合いたいという，社会的動機から。
- ・友人から話しかけられたとき，応じないと仲が悪くなってしまうのではないかと不安になるから。
- ・私語することによって仲間意識を確認するため。

<みんなが私語しているから>

- ・「赤信号，みんなで渡れば恐くない」から。

<スリル，反抗心>

- ・先生に見つかって怒られるかもしれないというスリルを感じるから。
- ・注意されると反抗心がわく。先生を困らせたくなるから。
- ・軽い気持ちでしゃべっているのに，厳しく怒られると不満が生じ，反抗する。
- ・だめだといわれるとかえってやりたくなる。注意されると余計にしゃべりたくなる。笑ってはいけない場面に遭遇したとき，笑いが抑えられなくなるのと同じ。

<自己顕示欲>

- ・私語することによって，自分の存在を他者へアピールしようとする（自己顕示欲）。その結果，自律感や自己統制感を感じて満足するのではないか。
- ・ある静かな授業中にわざわざ携帯電話をかける女子学生がいた。周りからひんしゅくをかっていたが，彼女はあたりを見回し，満足そうにその夜の予定らしき話をしていた。

○物理的な学習環境が悪いと私語が増える

- ・大教室の場合：
教師との心理的距離が遠くなる。
隣の座席が近くて（密着しているので），しゃべりやすい。
個別に注意されにくい。しゃべっていてもばれにくい。
- ・心理学の教科書が大きすぎて具合が悪い。

授業中の私語

- ・冷房が利きすぎで寒いときは授業に集中できない。
- ・座席指定でないと友人同士が固まり、私語しやすくなる。
- ・時間帯が悪い。昼食後なので、友人と楽しく過ごした昼休みの延長のような気分。もっとしゃべっていたいという興奮状態にある。

○集団心理（群集心理）の現れ

- ・みんなもしゃべっているから。
- ・自分一人くらいしゃべっていてもたいしたことないだろう。
- ・大勢の中だから聞こえないだろう。
- ・誰がしゃべっているかわからないだろう。
- ・連鎖反応で自分もしゃべってしまう＜同調行動＞。
- ・＜群集心理の特徴を調べてまとめたレポートより＞群集心理の特徴は、共通の関心、匿名性、無責任性、無批判性、親近性の6つである。

○集団の凝集性の働き

- ・仲良しグループ、親密性、共通の話題・言葉・思想をもって集まる。
- ・友人とのおしゃべりは楽しいし、他人の私語は注意しにくい。

○教師のタイプを直感的に見分ける

- ・恐そうな先生の場合はしゃべらない。一般に男の先生の時は静かにする。
- ・優しそうな先生の時はしゃべる。男性でも年輩者や痩せている先生、そして女の先生など。そのような先生は怒っても恐くない。だから甘く見る。なめてかかる。全体に注意するだけとか、謝ったら許してくれる場合も恐くない。

○観察学習

- ・あまり他人の私語が注意されないと、私語はよいのだと思って自分もやり始める。

○受講目的や動機が不明確だと私語が増える

- ・出席をとるから出る。
- ・何となく受講した。
- ・あいた時間を埋めるために受講した。
- ・友達と時間を合わせた結果受講することにした。

○授業がおもしろくない

- ・授業内容が何に役立つかわからない。
- ・授業がわからない。
- ・心理学は自分の専門とは関係ない。
- ・期待はずれ。マスコミでもてはやされている、今流行の「心理学」の話を期待していたが、そのような話がない。＜この「心理学01」を登録する前に、シラバス（講義計画）をちゃんと読んだかどうか学生へ問いかけたい。そこには今流行の、あるいは学生の多くがそれこそ本来の「心理学」であると考えているらしい「プロファイリング」、「犯罪心理学」、「異常心理学」などの項目は挙げられていない。最初の授業時にガイダンスを行って、講義内容を概説し、他の心理学のクラスとの違いを説明した上で、納得ずくで受講を決めるよう指示したが、徹底していなかったようである。＞

○私語する学生の心理的特徴

- ・講義の私物化。高い授業料を払っているので共同の空間を一個人のものと勘違いしている。
- ・受け身の授業態度。
- ・自己中心的。心が成長していない。学生の幼稚化。
- ・人の迷惑を考えない。
- ・教師の視点に立って考えることができない。
- ・自己分析ができていない。＜私語している自分を客観視できない。＞

授業中の私語

<知的好奇心の欠如>

- ・自分の知っていることには興味を示すが、知らないことには無関心で手を出そうとしない人が多いように思う。知的好奇心なんてなくなってしまうように感じる。

<親の躾け方が悪い>

- ・親に責任があるかもしれない。教員をしている母親によると、授業中によくしゃべっている生徒の母親も、授業参観時によくしゃべるらしい。

○2種類の私語

- ・（すぐやむ）必要な私語と（延々と続く）不必要な私語を区別すべきである。<不必要な私語だけを問題視すべきであるという主張。>
- ・授業に関する私語は許容すべき。もし禁止すると、授業への興味・関心を失わせることになる。

3) では、どうすれば私語はなくなるか？

①私語の原因の捉え方<原因帰属の仕方>に2タイプある

<外罰的>

- ・私語容認派や自己中心的な人に多い。授業がおもしろくなくて退屈だからしゃべる。<おもしろい授業だったら全くしゃべらないと確信できるか？>

<内罰的>

- ・学生の自覚が足りないからしゃべる。自覚ができれば自ずと私語はなくなるはずである。

②教える側から考えられる対策

○1クラスの受講者数を減らす

- ・大教室で大人数を対象とした一斉授業から、小教室で少人数による学生参

加型の授業に変える。＜これは、まず最初に検討すべき改善策である。一クラス最高でも200人以下に押さえることができれば、私語問題はかなり解消されるであろう。＞

○授業内容や方法を改善する

- 学生を釘付けにするようなおもしろい授業をする。＜おもしろい授業とはどのようなものか、具体的に知らせてほしい。＞
- 学生が興味を示しそうな内容（たとえば「臨床心理学」）に変える。＜本来の教育目標があるから、簡単には授業内容を変えることはできないが、今日的な問題として必要に応じて取り上げることは可能である。＞
- 心理学が何に役立つか伝えるべき。＜「心理学」とはいわゆる「犯罪心理学」や「異常心理学」を指すもので、それ以外は「心理学」ではないという強固な先入観をもっている学生の場合には、「心理学01」の内容やおもしろさはなかなか伝わらないかもしれない。実際、今回のレポートや以前に提出させた授業中の小レポートの内容を見ると、そのような思い込みが多く見うけられる。そのため、「心理学01」に拒否反応を示す学生は少ないようである。＞
- 90分の授業時間は長すぎる。途中で息抜きがほしいので、適宜休憩時間を設ける。＜大教室では、休憩時間が終わってもすぐに学生が集まらない、教室内のざわめきがなかなかおさまらない、など授業開始までの時間的・労力的な損失が大きくなると考えられる。この場合、休憩時間をとることが必ずしも授業効率の向上につながるとはいえないであろう。＞

○学生の注意を授業に向けさせる＜次の策はとても有効であるが、大教室で毎回実施するのは難しい。＞

- 毎回質問票を渡して記入させる。
- 毎回感想文を書かせる。
- 何か作業をさせる。

授業中の私語

- ・視聴覚機器やビデオをもっと多く利用する。
- ・心理テストや小テストの実施。何か小さな課題を出す。

○明確な罰（ペナルティー）を与える＜この厳罰主義を第一に掲げた者が非常に多かった＞

- ・飴と鞭を使う。私語しないときは誉め、私語した者には直接厳罰を与える。
- ・見せしめが必要。私語に対する厳罰を観察学習させる（退場、名前の確認、減点や受験資格剥奪）。
- ・「目には目を」、「歯には歯を」という「恐怖」の「管理授業」をやるべき。「心理学01」では心理作戦で穏便に静かにさせようとしているがつけこまれるだけ。本気で黙らせたいのならもっと力でねじ伏せたほうがよい。
- ・厳しい対策を採る。うるさくなったら即刻授業を中断し、後で補講をする（その時はやる気のあるものしか来ないだろう）。

○口頭以外の注意の仕方を考える

- ・「自習中の生徒への無言の視線効果」＜ある社会心理学実験に関する報告を読んでの提言＞：教室の前に教師がいて時々注意する条件では、隠れてしゃべったり居眠りする生徒が増えた。それに対し、教室の後ろに教師がいて黙ってみている条件では、だんだん私語が少なくなり、静かに自習を続けるようになったらしい。
- ・私語がやむまで教師が沈黙する。＜これは一種の「図と地の反転」を利用した方法である。教師の突然の沈黙は騒音のなかではかえって一瞬「図」となるから、意外に効果があるかもしれない。実際これはよく使われる手である。また、スクリーン上に「静粛に！」などと大きく注意事項を提示するのもよいかもしれない。＞
- ・騒がしくなったら机をたたくとよい。＜さらに騒音を出すことになるので、これはやらない方がよいであろう。＞

○座席を変える

- ・座席を固定し、友達同士が固まらないようにする。
- ・しゃべる人は後ろの席に多いので、前に移動させる。

○教師が教壇から降りて「ウロウロ」＜いわゆる「机間巡視」＞しながら個別に質問していたが、効果があった。

○教育制度の改善

- ・アメリカの大学のように卒業しにくくするといった教育制度そのものを変える必要がある。

○＜教師の視点＞に立たせてみる

- ・大教室での授業がどんなに大変か気づかせるために、数人に教壇の上に立ってもらおう。

○本当に聞く気のある人だけ集めて授業すればいい。＜もしそうできればお互いに好都合であるが、現実はなかなかそうできない。＞

③学ぶ側から考えられること

○みんなで自覚を持とう

- ・今回のレポート課題を見たとき、私語について今までちゃんと考えたことがないのに気づいた。
- ・迷惑な私語をなくすために各自が自覚を持って授業に臨もう。まずは自分が私語を慎もうと思う。
- ・行為の主体は自分であるという自覚を持とう。受け身ではなく、積極的な授業参加をしよう。
- ・みんなで私語は許さないという雰囲気を作り出すことが大切。
- ・話しかけてこられたら、「ノー」と言えるようにしたい。

授業中の私語

- ・大教室では教師一人で私語をコントロールできないので、学生同士で注意し合うことが大切だ。
- ・おもしろくなかったら寝る。寝ている友は起こすな。
- ・友達と隣り合わせに座るとしゃべってしまいそうなので、いつも一人離れて座るようにしている。
- ・高い授業料を払っていることを忘れていない。

<授業への認知の仕方を変える>

- ・授業に対する自分の考え方を変える。
- ・授業に対して興味を持ち、自分なりに目標を持って励めば、私語する暇がなくなる。
- ・将来何かの役に立つかもしれないからしっかり聞く。
- ・単位が必要だから、必修だからという理由では長続きしない。
- ・講義をつまらないと思うのではなく、いかに自分の問題に近づけておもしろくしていくかが学生にとっての醍醐味と思う。
- ・いくら楽しい授業、よい環境でも、自分がそれに興味や学習目標を見出せないと、学ぶことや理解できた喜びは感じられない。その場合は私語をやめられないだろう。
- ・教師による押さえつけは表面的な効果しかない。個人の自覚がなければ抜本的な解決策とはならない。

○私語はいかに迷惑な行為か？ 私語についての自己分析

- ・私語にマシはない。どんな性質の私語でも迷惑であることには変わらない。
- ・このレポート課題をきっかけに、私語する自分を見つめ直し、反省した。
- ・私語について真剣に考える機会が与えられたことに感謝する。
- ・なぜ私語するか今まで深く考えたことはなかったが、今回はじめて客観的に自己分析できた。〈同様な感想が複数のレポートで見られた。〉
- ・私は中学校以来、授業中は極力私語をしないようにしてきた。それではじめて授業中の私語がどれほど迷惑かがわかった。

- ・授業中の私語には罪悪感があるので、個人的には私語しない。
- ・今の学生は墮落しきっている。自分の夢さえ持たないでそれでも生きていけるほどしたたかだから、厳罰を与えないと私語をやめない。でもそこまでしなければ私語がなくなるなんて、大学生にもなって悲しく情けない。

○面白い（学生に興味をを起こさせるような、遊び心のある、みんなが釘づけになるような）授業をしてほしいという意見に対する反論

- ・ビデオを使った授業がいつも面白いとは限らない。ある授業では、いつもサイレント映画を見ていたが、かなりうるさかった。しかし、ホラー映画の時は静かになった。＜ビデオの内容によって私語が増えたり減ったりするので一概にビデオ利用が効果的だとは言えない。要は使い方次第であろう。＞
- ・人によって興味の対象は異なる。誰にも面白い授業なんてありえない。
- ・授業内容の改善には限度があり、つまらないから私語するというのは学生の言い訳である。
- ・ちゃんと予習してきたか、授業を理解しようと努力したか？ 面白くないなら出なければよい。
- ・私は心理学を学ぶことは人間的に視野を広げていく一つの方法だと思う。

○話し手に強いカリスマ性があれば、話しに引きつけられて私語が減るだろう。＜教師がテレビのワイド・ショーなどで大活躍している著名な犯罪心理学者のようであつたら授業を聞くようになるということらしい。いかにもテレビ世代ならではの捉え方である。＞

3. 優れたレポートの紹介とレポート内容分析結果の報告

後期の最初の授業時に、まずよく書けている数人のレポートを名前を伏せ

て読み上げた後、レポートの内容分析結果をまとめたプリントを配布し、約1時間かけて結果の報告と問題提起を行った。

ある社会学部社会福祉学科3回生のレポートを読み上げたときは、教室は静まり返り、全員が真剣に耳を傾けていたように思う。切々と私語の弊害を説き、静かな授業を受ける権利を訴える、そのレポートの最後の部分を紹介しよう。

「私は前期の間、この心理学が不愉快でたまらなかった。四方八方で話し声がし、それが90分も続くのである。週一回のこの時間が来るのがゆううつであった。私の真剣に取り組みたいという気持ちはいつも乱され、私の静かに授業を受ける権利も毎回奪われている。後期になっても前期と様子が変わらないようであれば、私は授業に出るのをやめようと思う。先生がこのまま何の手段も取らずに進めるのであれば、せめて補講をして頂きたい。もちろんそこには私語をする人間の入室は禁止である。先生は静かに授業を受けたいと願う生徒に対して、私語のない授業を提供する義務があるのではないだろうか。＜中略＞後期はこんな嫌な思いをしなくて済むような環境にしてほしいと願ってやまない。」

今回の試みでは、多岐に渡る学生の見解や提言を授業のなかで公表することにより、私語に関する他者の考えや気持ちを知り、私語の弊害に気づき、私語のない授業の実現に向けて努力するよう動機づけることを目指した。すなわち、各人の私語への許容度や私語の原因帰属の仕方に見解の相違はあれ、私語が授業の妨げになることを再確認し、私語のない授業を目指して教員と学生双方が協力する必要があることを、教員の立場から強く訴えた。

そしてその後、私語は確実に減少した。2回ほど学生証を没収し個人的に厳しく注意したことがあったが、最近は静かに授業を聞くようになった。時々ざわめくこともあるが、「静粛に！」カードをスクリーンに大写しする、突然沈黙して騒がしい方を凝視する、口頭で注意するなど、早めに対応すれば

すぐに私語をやめるようになった。受講者数の減少（所々に空席が目立つようになった）、授業内容の変化（発達段階理論や発達過程に関する領域に移り、学生の関心が高まった）、プリントなどの補足資料やビデオなどの補助教材の拡充、などいくつか原因が考えられるが、最も主要な要因は、レポート課題を通じて学生の認識が変容し自覚が芽生えたことと、「私語による授業妨害は許さない」という教員側の断固たる決意であったかもしれない。

しかし、一安心したのもつかの間、学園祭が終わった直後の授業中に再び目障りな私語が発生した。その日見せたNHK放送大学のビデオ教材の画質が悪く、画面表示された文字の一部が読みとれなかったうえに45分間も単調な講義場面が続いたこと、そして多分、学園祭直後で学生たちの気もゆるんでいたこと、などがそのおもな理由として考えられる。上映中、筆者は机間巡視して目立つ私語は個別に注意して回ったが、ビデオの内容に関するもの（画面上の文字や講義内容についての確認など）は黙認せざるをえなかった。このような中途半端な対応が引き金となり、授業終了後に受講生の一人が学務課へ直接行って「私語監視員」の派遣を要請するというハプニングが起こった。

その新たな問題に対処するため、教務委員長や学務課長とその善後策について協議し、当該学生とも個人的に面談を行った。その結果、次の授業で「私語」を教室からなくすための最終案として「監視員派遣」問題を取り上げ、もう一度学生たちに私語問題を徹底的に考えさせることにした。すなわち、授業のなかで再度「授業中の私語」に関する危機的状況を訴え、受講態度の改善に向けて学生へ猛省を促した。「心理学01」クラス全体の取り組みとして私語のない授業の実現を目指すためには、お互いに私語を注意し合い私語を慎むというクラス内での自浄作用が必要とされるうえに、私語は自分たちの問題であり自分たちで解決していかなばならないとするクラス自治の意識をもつことが重要である。「監視員派遣」についてはしばらく様子を見てからどうしても必要ならば要請することにした。そして、その後の授業では、教室は静かな状態に戻っている。

Ⅲ おわりに

本稿では、「授業中の私語」問題を授業課題の一つとして取り上げ検討し授業改善を図る，という授業実践について報告した。私語に悩まされていた「心理学01」のクラスで，各自が私語の心理を分析してどうすれば私語はなくなるかその解決策を考察し小論文にまとめ，それらの見解についてみんなで考えてみた。今回の試みでは，このような心理学の科目特性を活かした取り組みを通じて授業中の私語問題をほぼ解消し（駆逐することまでは叶わなかったが），静かな教室を取り戻すことができた。

本川達雄・東京工業大学教授は，私語に手を焼き授業を打ち切るという苦い体験を経て，講義の最初には「講義はテレビじゃないのだよ。生の芸なんだ。教師と生徒で作っていくものなんだ。」と一席ブツことにしているそうである⁴⁾。また，私語研究をしている島田博司・武庫川女子大学助教授⁵⁾は，おしゃべりしながら授業も聴いているという「ながら視聴」から「授業は聴く気になったら聴けばよい」という「非聴取的聴取」に最近変わってきたのではないかと考え，「私語を学生の心構えの問題と，道徳的に迫るのではなく，多メディア時代に応じた授業のありかたを考えること」が重要であると述べている⁶⁾。

「授業中の私語」問題の根は深いようである。筆者も今回の経験を一つのステップとして，これからも他の様々な意見や試みを取り入れながら，私語のない授業実践に挑戦していきたいと考えている。

註

- 1) 新堀通也『私語研究序説 現代教育への警鐘』玉川大学出版局 1995, p.37.
- 2) 「罪障」とは本来は「成仏のさわりとなる罪過」を指す仏教用語であるが、ここでは「罪悪感」といった意味で使われていると考えられる。
- 3) 前掲書1), pp.36-37.
- 4) 「講義はテレビ」, 1996年7月15日付, 朝日新聞.
- 5) 現在, 甲南女子大学助教授
- 6) 「講義は聴く気になったら——教員も新たな対応考える時」1995年6月28日付, 毎日新聞.

Talking in Class: Results of Self-Analyses of This Problem by Students in "Psychology 01"

Keiko SHIMIZU

Recently in Japan, talking in class in universities, in addition to elementary schools, junior-high schools, and high schools, has been one of the severe problems of school education. It seems that such a phenomenon has become a serious concern, especially in large classrooms. In my particular case, students in my class "Psychology 01" seldom or never raised a hand or asked a question, and seldom or never came to me voluntarily. They ordinarily sat in the back of the room, whispering gossip unrelated to the class, and also disturbed classes by their noisy and long-drawn-out speaking.

They may well be aware that talking in class does entail a good deal of trouble for the teacher and the other earnest students. However, they couldn't seem to stop. Why did they continue to talk during class? I decided to give them an assignment: self-analysis about the psychology of talking in class, and made them hand in a paper about it before last summer vacation. The present paper discusses the results of their self-analyses.